CIGS 宮家邦彦 講演会
2013 年 10 月 7 日（月）15:00-17:00
経団連会館 経団連ホール（千代田区大手町 1-3-2）

質疑応答

質問 1：
お話しいただいた「日本自身の保守主義の進化が必要」ということについて、もう少しご説明いただけませんか。また、「日英で今後島国同盟を進める」という部分についても、ご説明をお願いします。

宮家氏：
個人的には、保守主義は大事な考え方で、尊重されるべきだと思っています。国民に害をもたらすような極端な保守主義は困りますが、国の方向性あるいは戦略の決定という極めて重要な決断ができるのは、左ではなくて右だと考えています。例えば、エジプトとの関係正常化を図ったイスラエルのベギン首相、米中国交樹立に踏み切ったニクソン大統領はいずれも保守主義者で、その決断によって国の方針を変えました。正しい方向に変えたと思っています。このようなことから、いま日本で進化しなければならないのは保守主義なのだと考えています。
英国との関係ですが、日英同盟の時代は本当にお互いに助け合いました。英国は知恵があり、英国人から学ぶことは沢山あると思っています。しかし英国も、香港などを失ってアジアでのプレゼンスは小さくなっています。英国軍に日本は守れない。同盟という意味ではやはり米軍がまず第一です。英国の知恵を拝借しながら、しかし、安全保障という点では、オーストラリアや他の Like-minded なアジア諸国と協力し合うべきでしょう。

質問 2：
中国に対してこうすべきだと助言をするのは難しさがあると思いますが、いかがでしょうか？

宮家氏：
おっしゃるように、中国に対してあれこれ言っても、そのとおりやる人達ではありません。日本人の言うことなど聞きません。そうではなく、日本が模範や実例を中国に示したらよいのではないかと考えています。こうすればよいのだなと中国に思わせる。日本がそうした暗喩を与える努力を続ける限り、必ず中国の知識人の一部はそれを見てくれていると私は信じています。

Copyright©2013 CIGS. All rights reserved.

質問 3：

お示しになった 7 つのシナリオという点について、私はまだ一つ足りないシナリオがあるのではないかと考えます。つまり、民主化、独裁強化、民主化失敗、統一、分裂、混乱など、すべてが混沌としてグレーのまま進むというようなシナリオがあるのではないかと思いますが、いかがでしょうか。

宮家氏：

私は 7 つのシナリオに至る前に、いまお話しがあったような状態があり得ると思っています。その結果、社会的・政治的な変化が起き、そしてこの 7 つのシナリオのどれかに至っていくのではないかと思います。

戦争が中国にとって何の利益ももたらさないことは明らかだと思います。では戦前の日本はどうだったのか。アメリカと戦争して勝ち目があったのか。真珠湾を攻撃することにどれだけのメリットがあったのか。今から思えばそれは無いと言えます。しかし、いま中国が進もうとしている方向と戦前に日本が経験したことは、どこが同じでどこが違うのか。これを見極めることは決して無駄ではないと思います。例えば、統帥権の独立の問題。人民解放軍が国家の軍隊ではなくて党の軍隊であることは、中国における統帥権の独立の問題ではないかと思います。こういうことを研究して行く必要があると思っています。

質問 4：

中国の外交当局は国家関係・国際関係というものをどのようにみているのでしょうか？西側の通常の外交官と同じような概念で考えているのでしょうか？

また、中国の人民解放軍が分裂したときに国家の分裂が起こる可能性があるというお話しがあったと思いますが、人民解放軍は幾つかの軍区に分かれていて、軍区間にいろいろ複雑な事情があるというようなことを聞くのですが、いかがでしょうか？

宮家氏：

中国外交部の官僚は、大体西側の外交官と同じです。英語や他の外国語も上手だし、我々の常識は大体通じます。根本的な問題は、中国の外交部長というのは中央委員の一人、つまり 204 分の 1 でしかないということです。日本を含む各国の外務大臣は、政府部内でもかなりの高官です。ナンバー2 とかナンバー3 とかいうレベルの人もいます。従って、例えば、日本でも外務省内の官僚が総理大臣に説明するというようなことがあり得ますが、中国では、例えばアジア局長が総書記に会って日中関係を説明するというようなことはあり得ません。つまり、中国の外交官は、個々の能力は高くても、地位や権限が全く他国と違うのです。日本の外務官僚は、カウンターパートとして彼らを相手にしなければなりませんが、彼らの影響力は限られています。非常に残念です。せめて、チャイナセブンの一人くらいに外交を担当してもらいたいと思いますが、実態は政治局員 25 人の中にも恐らく外交実務をやる人はいない訳で、私は中国外交部の人達には同情を感じております。

人民解放軍について、昔は、過去の軍閥の影響があったり、軍区が独立した時代があっ

Copyright©2013 CIGS. All rights reserved.

たと思いますが、いま私の知る限りでは、人民解放軍や党の中で幹部人事やローテーションを行って、特定の地域で特定の権力が生じないようにかなりの努力をしています。従って、昔のような形の軍閥ができる可能性は非常に小さいと思っています。それでも薄熙来などの動きを見ていると、その予兆のようなものが見えて、やはり中国としても手を抜けない分野なのだと思います。

質問５：

国家ビジョンに関連して、歴史認識の問題があります。例えば、日中韓で歴史認識を学術的な研究に委ねるとか、共通認識を作り上げるとか、そういう努力が非常に重要なステップだと思いますが、いかがお考えでしょうか？

質問６：

中国には、道教とか儒教とか古来の宗教がある一方、一神教から生まれた普遍的価値を受け入れていく素地は十分にあると思っております。その点についてどうお考えでしょうか。

また、中国には、過去の歴史に対する屈辱感、古来の大国意識など、いろいろな国民感情・意識があると思いますが、これに対して日本はどう対処していくのがよいとお考えでしょうか？

質問７：

東アジアのパワーシフトの中で、台湾の位置づけをどのようにお考えでしょうか？また、日台関係がこれからどのようになるとお考えでしょうか？

宮家氏：

私は中国にも普遍的な価値があると思っています。文革が壊す前の中国の倫理観・文化の中には普遍的なものが多くあったと思います。まずそれを取り戻してもらいたい。そのうえで、様々な価値観を受け入れるのがよいと思います。それには、言論の自由や思想の自由が必要です。今の共産党のイデオロギーというものがそういった普遍的な思考というものを妨げているのかもしれないと思うこともあります。

それから、中華思想という言葉は日本人が作った言葉です。ですから、中国は中華思想で動いているということはありません。しかし、それと似たような意識はあります。

中東諸国と中国は実によく似ています。世界は自分を中心に回っていると思っているようなところ、他人を信じないで家族と部族しか信じないようなところ、援助は人にやらせてやるもので感謝するものではないというような意識、面子を大事にして面子を潰すと何をするか分からないようなところ、都合が悪くなるとみんなアメリカの陰謀のせいにするとか、そっくりなのです。しかし、それは途上国なのだということです。

従って、いま申し上げたような途上国なら誰でも持っているような自己中心的なところと、中国的な本質を混同すべきではないと思っています。

Copyright©2013 CIGS. All rights reserved.

中国と日本との間には歴史認識などいろいろな問題があります。大陸から一島国をみる優越感、その日本に侵略された劣等感。日本にも優越感と劣等感があります。韓国も同じだと思います。この優越感と劣等感をある程度お互いに克服しないと、なかなか次の段階に進まないと思います。

台湾の話ですが、台湾についての私の立場は、日中国交正常化以来、日本政府と同じです。ただ一点だけ指摘したいのは、少なくとも近代の日本になってから、日本に敵対する勢力によって台湾が支配されたことはないということです。それ故に、台湾のステータスが変わったときの戦略というものを、我々はまだ十分考えていないと思います。例えば、今のような台湾がなくなった場合に、日本のシーレーンに与える影響は測り知れないものがあります。日本は致命的な打撃を受けるでしょう。この点だけとっても、台湾は戦略的に極めて重要なのだと思います。ただし、それを決めるのは中国の人達です。中国と台湾の人達が民主的に決めていくことです。そのことの意味を我々は十分に考える必要があります。

以　上

Copyright©2013 CIGS. All rights reserved.